

# Gikyohan Times

No.0010

GIKYOHAN TIMES

2021年3月発行

## 「デジタル教科書」について

当社は岐阜県の全小中高校に紙の教科書を供給し続けて100年以上の会社です。当社は岐阜県の全小中学校に「SCHOOL e-LIBRARY」進呈させて頂きました。配送も終了しました。経産省の見守り事業でもありますので是非ご使用して頂くようお願い致します。岐阜県の子どもたちに新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。現在購読リストに洋書を続々UPしています。ぜひ英語教育にも役立てて頂ければ幸いです。尚、商品の詳細情報は当社HP (<http://www.gifukenkyohan.co.jp>) のバナーでご確認できます。尚、岐阜県教販通信のバックナンバーもHPに記載しております。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省NO.1の論客でなし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

小学校で今年度、中学校で来年度から新しい指導要領が実施されるのに伴い、デジタル教科書の存在がクローズアップされている。文部科学省は、小学校の次期教科書改訂が予定される令和6年度(2024年度)からの本格導入を目指すとしてきた。

コロナ禍によるオンライン授業などの影響で、小中学校に1人1台の児童・生徒用コンピューターを整備するGIGAスクール構想が前倒しされ今年度中に達成されたり、政府が社会のデジタル化を目標としたりする中、すぐにでも教科書が完全デジタル化され、従来使ってきた紙の教科書が消えてしまうかのような風説が流れたこともある。

だが、このほど文部科学省は、デジタル教科書が本格導入される令和6年度以降も紙の教科書は引き続き存続させ、紙とデジタルを併用していく方針を固めた。「紙の教科書が消える」は、気の早い思い込みだったようだ。

それはそうだろう。私たちの社会は、江戸時代の寺子屋教育から紙の教材で学ぶのが当たり前だった。明治に学校制度ができてからでも、150年近く、紙の教科書を使い続けてきたのである。それを全部デジタルに切り替えてしまうのは、そう簡単な話ではない。

親も教師も、全ての大人が紙の教科書を使ってきた。それを無くしてしまうことにどうしても抵抗感がある。デジタル教科書導入には賛成してくれるだろうが、全部そうなるという、少なからぬ数の大人が心配になってくるのではないかと。自分たちは紙の教科書だったのに、それを無くしてもいいのか... との感情論だけの問題ではない。コンピューター画面の多用が子どもの目にどのような影響をもたらすかの心配もあれば、一部脳科学者による脳のメカニズムとの関係を憂慮する声もある。文部科学省が慎重な姿勢になるのも無理はないだろう。デジタル教科書の利点は十分承知していても、混乱を避ける配慮は必要になる。そもそも、紙かデジタルかの二者択一ではない気がする。今まで紙だけでやってきた学習に、デジタルの良い点をどんどん取り入れ、有用な部分はすぐにでも切り替えていけばいい。だが、前々回のこの通信に書いた<目的>と<手段>の話の思い出してほしいのだ。デジタル教科書を取り入れていくのは、教育をすばらしいものにしていくという<目的>のための<手段>である。<目的>は、あくまで、子どもたちの学習を深く豊かなものにするのであって、「紙の教科書を無くす」ことではない。

いずれ遠い未来には、紙の教科書どころか紙の本がなくなる時代が必ず来るではあろう。しかし、それはよりよいコミュニケーション媒体を作っていくという<目的>に向けて進んだ結果であって、無理にそうするものではない。

紙の教科書が無くなるとか、デジタルを万能視するとかの前に、今学校で学ぶ子どもたちにとって場面場面で最適な教材を選び、それをスムーズに提供することこそ、教育に当たる者にとっての責務だろう。

現在の最大の課題は、紙とデジタルをどう具体的に組み合わせるのか、なのである。